

令和6年度（第47回）

校内放送指導者講座 報告

令和6年12月26日（木）、27日（金）の2日間、東京都千代田区紀尾井町の千代田放送会館において校内放送指導者講座が実施されました。主催は全国放送教育研究会連盟とNHKです。高等学校における校内放送活動の意義と役割を深めその指導についての諸問題を究明するとともに、具体的な指導の充実を図ることを目的とする全国の高等学校の放送部の顧問を対象にした研修会です。毎年12月下旬に開催されており、今回もオンラインでの配信も行うハイブリッド形式で実施しました。昨年に引き続き、オンラインでの参加者は、個人での参加に加え、各都道府県で1か所に集まってグループ討議をしながら講座を受けるグループ参加の形式も取り入れました。会場に61名の参加者、オンラインには、84名を迎えての実施となりました。



研修会のプログラムは以下の通りです。

講座1「アナウンス・朗読 模擬審査」

講師：NHK財団ことばコミュニケーションセンター 専門委員 佐藤 淳

講座2「ラジオドキュメント部門「蓋をあける」ができるまでと、そのための環境づくり」

講師：北海道札幌手稲高等学校 渡辺 弘樹

講座3「NHKの放送ガイドラインと著作権について」

講師：NHKコンテンツ戦略局・企画管理センター 小林 恭子

講座4「番組 模擬審査」

講師：NHKメディア総局第1制作センター 教育・次世代

チーフ・ディレクター 津川 明久

会場での参加者は7人から8人のグループに分かれて、グループ討議などを交えながら進めました。各講座の内容は以下の通りです。

講座1「アナウンス・朗読 模擬審査」

講師：NHK 財団ことばコミュニケーションセンター 専門委員 佐藤 淳

講座1は、180分間のアナウンス朗読模擬審査講習を行いました。講師には、NHK 財団の佐藤淳専門員をお招きしました。佐藤先生は、NHK アナウンサーとして数々のご経験を積まれた後、現在はアナウンサーの職員研修や、学生・一般向けの話し言葉セミナーの講師をご担当なさっています。71大会では決勝の審査員をご担当いただきました。



講座はまず、審査基準を確認し、71大会の全国大会準決勝に残った3年生のアナウンスを4人模擬審査するところから始まりました。その後、約30分間、グループ討議の時間を設け、ファシリテーターの先生を中心に、それぞれの審査の観点などを話し合いました。

次に、集計結果（会場の平均点、最高点・最低点、佐藤先生の評価点、コンテストの評価点）を発表し、それを受けて、佐藤先生の審査のポイント講習を15分間お聞きするという流れで進めました。これを休憩をはさんで、アナウンスのあと、朗読でも行いました。

さらに講座の最後には、資料とパワーポイントを用いて、これからの指導に役立つエッセンスを20分ほどお話いただき、質疑応答の時間で締めくくりました。

佐藤先生からお話いただいた内容の概略を、一部ですが、ご紹介いたします。

アナウンス部門に関しては、まず、テーマが興味深く、キーワードがわかりやすいかどうか、特にリード文の大切さを指摘されました。さらにジャーナルな視点でレポートできているか、文章表現は話し言葉で短くまとめられているか等、アナウンス審査のポイントを挙げてご説明いただきました。実際の原稿を使って、談話の中に情報を詰め過ぎない点などの具体的なご指導もいただきました。

朗読部門は、71大会で人気の集まった2場面に絞って模擬審査を行いました。先生からは、時には作品の中に入り、実況するように語り掛けるという練習もご提案いただきました。作品には、作者、発表者（朗読する人）、聞き手、それぞれの解釈が生まれるが、一番尊重すべきは作者の意図であること、ドラマティック過ぎずに、受け止める聴き手の想像力にゆだねることなどもご教示いただきました。同じ場面でも読み手によって表現が変わることも実際に実感でき、比較することで理解が深まりました。

最後のまとめでは、以下のような点に触れていただきました。

- * しっかりした息を作ることが大切。「天気予報です。」＝1秒 → 一息で何回言えるかを鍛える。
- * のどを開いて、体を楽器にするイメージで。4、5メートル先にいる人に届けるつもりで発声する。
- * 一つの息で一つのまとまりを言い切る。
- * 原則、出だしが高く出て、終わりが低くなる。「音の立て直し」は追加事項を伝える時に。
- * 定型文のアナウンスはAIでもできる。人間の仕事はその瞬間の意味を伝えること。
- * 正確さ、わかりやすさが最重要。＋ 誠実さ、親しみやすさ
- * 聞く人への配慮。語りかけるイメージで。
- * 主語＋述語を見極めて理解する。すぐ声に出さず、必ず黙読をしてから読む。 等

全国大会の上位者という難しい模擬審査が続きましたが、「審査は主観の集合体です。先生方それぞれの物差しを持つことが大切です。」という佐藤先生のお言葉に今後への自信をいただいて、講座1はお開きになりました。佐藤先生、ご経験に基づいた貴重なアドバイスをありがとうございました。

講座2「校内放送指導実践発表

ラジオドキュメント部門『蓋をあける』ができるまでと、そのための環境づくり」

講師：北海道札幌手稲高等学校 渡辺 弘樹

第71回NHK杯全国高校放送コンテストのラジオドキュメント部門で優勝した北海道札幌手稲高等学校放送局顧問の渡辺弘樹先生を講師としてお迎えし、具体的な番組制作にまつわるお話と、日常の指導についてお話しいただきました。生徒の自主的な活動を尊重しながら、ご自身も放送の活動に熱心楽しく取り組んでいらっしゃる事が感じられるお話でした。



作品「蓋をあける」に関して、まずは全体の構成「アバン（タイトル前のプロローグ部分）、起、承、転、結」の説明、各部の時間（秒数）について触れた後、「アバン」の特徴とその効果について分析してくださいました。「承」取材対象となっているAさんとその他のインタビューとの流れ、「結」で自分たちの結論を入れなかったことについて、入れるか入れないか討議したことなどをお話しくださいました。そして、この番組の強みとなったと思う点について以下の点を挙げてくださいました。

- ・2つの意味を持つタイトル
- ・リアルな声を入れられた点（声の力）
- ・医者やドラッグストア協会への取材を入れられた点
- ・結論をはっきりと言わなかった点

また、制作活動の強みとして「ネタ会議」「下取材」「視聴会」を行っていることを挙げてくださいました。前年度の全国決勝に参加して「絶対優勝したい」と生徒たちが感じたこと、取材途中のトラブル、取材対象との関係などの番組制作の裏話もお話しくださいました。

顧問としての生徒との関わり方の要点については、以下のように話されました。

- 技術指導はしない（助言を求められればアドバイスはするが、積極的に「こうしなさい」とは言わない）→結果として、顧問の想像を超える作品ができた
- 自治意識を大切にし、上手く持たせる（このお膳立て、裏での暗躍が顧問の役目！）
 - ・新入生への指導は2年生の役目
 - ・3年生引退の際に2年生全員と個人面談
 - ・秋の地区大会のあと、1年生ミーティング

「見通しも実力のうち」「一番大事なのは気持ち」ということを生徒によくおっしゃるそうです。自治意識を持たせる一方で、新しいアイデアは顧問から積極的に提案しているとのことで、以下のようなアイデアを紹介してくださいました。

アナ朗校内発表会、シャドーイングコンテスト、8校合同交流会、卒業生を交えた合宿、脚本コンテスト、写真コンテスト、HP デザインコンテスト、公式ロゴコンテスト、人物 CM コンテスト、等

以上、放送部顧問として、これは自分の学校でも実践してみたい！この姿勢は見習いたい！と思うことばかりの楽しいお話でした。渡辺先生、お忙しい中ありがとうございました。

講座3 「NHK の放送ガイドラインと著作権について」

講師：NHK コンテンツ戦略局・企画管理センター副部長 小林 恭子

番組制作においては、使用する音楽・映像素材の著作権や取材対象への様々な権利保護を意識して制作します。高校放送コンテストにおいても20年ほど前に新教科「情報」が登場したあたりから権利意識の啓発に取り組んできました。

今回は、「NHK で放送されることを前提として出品するコンテンツ作りにあたり、NHK の取材、制作ルールを知る」というテーマで、NHK の放送ガイドラインを基に、NHK の制作現場でのエピソードを交えてのケーススタディーとなりました。

取材において、どういう番組になるのか着地点をしっかりと説明した上での依頼がとても大切であることが語られました。取材内容や素材の並べ方など編集の仕方次第で、視聴者の受け取り方が180度変わってしまうことがあること、そのために取材対象者からのクレームにつながるなどトラブルに発展してしまう可能性があること、高校生の場合は大人である教員の目が必要であることが語られました。

この他、参加者からの質問である映り込みの考え方や許容範囲、どこからが商品広告になってしまうかについてもお話をいただきました。線引きは難しく、それを放送した場合に起こり得ることを「想像」して判断することが大切であることが共有できました。



講座4「番組 模擬審査」

講師：NHK コンテンツ制作局 第1制作センター＜教育・次世代＞
チーフ・ディレクター 津川明久

講座4「番組制作指導」は NHK コンテンツ制作局 第1制作センター＜教育・次世代＞ チーフ・ディレクター津川明久さんに講師をお願いしました。具体的な時間の割り振りは以下の通りです。

（午前 80 分）

自己紹介、経歴やこれまでに担当された番組についてなど（約15分）

ラジオドキュメント模擬審査（約15分）

ラジオドキュメント意見交換（約30分）

津川さんによる講評（約20分）

（午後 150 分）

創作テレビドラマ模擬審査（約20分）

創作テレビドラマ意見交換（約15分）

津川さんによる講評（約20分）

津川さんによる講演（80分）

受講生からの質疑応答（15分）



模擬審査

第71回全国大会で準決勝に出品された作品のなかから、今年度は「ラジオドキュメント」「テレビドラマ」から3作品ずつ選び、それを上映して模擬審査を行いました。模擬審査の後には、受講生同士が互いに、点数や感想などを30分程度意見交換しました。顧問1年目の先生の視点や何十年も顧問を務めているベテランの先生方まで様々な視点で話し合う様子が見られ、大変盛り上がっていました。また、津川さんの点数はやや高く、受講生や実際のコンテストの平均点に比べると、大変優しい採点をしてくださった印象を受けます。

講師による講評・解説

ラジオドキュメント

番組を通して最終的に何を言いたいのかを明確にすることが大切である。今回上映した作品中に、難しい言葉（病気の名称）が登場した。ラジオではうまく伝わりにくい難しい言葉をできる限り使わず、簡単な言葉で表現するよう工夫すると良い。

テレビドラマ

わかりやすさや伝わりやすさはもちろんであるが、「もう一回見たい」と思わせる作品づくりも大切。ドラマの演技は上手でなくても、生き生きと演技できていれば良い。放送部をテーマにしたド

ラマの場合、放送部ではない人にもきちんと伝わるのかを意識するとよい。カット割りは、一つ一つのシーンに意味を持たせること。例えば足元のカットを撮るのであれば、そのカットが主人公のどのような心情を表すのか、また視聴者に何を伝えるのかなどをきちんと意識しましょう。

休憩の後、予めお願いしていた質問に対するお答えをいただきました。

まずは皆さん一番気になる「準決勝に進む作品とそうでない作品の具体的な違いは」について、津川さんはオリジナリティーが一番重要ではないかとのこと。具体的な違いはファシテーターの二人に話が振られました。

一人目の先生はドキュメント担当。まずは取材が大切とのこと。できるだけたくさん取材をすること。番組は取材8割、編集2割と言っている。もう一つは「私たち高校生と放送」というテーマ。いきなり遠い大きなところから始めず、入口は身近なところから始めるのがいい。そういうふうに考えてこのテーマだと思う。身近な事でも実は知らなかったということが意外とある。よくある話かと思っていたら意外な展開だったというのは準決勝に行けるヒントになるかも。

二人目の先生はドラマ担当。準決勝に行けるのは「運」としか考えられない。審査は審査員のそれぞれの観点で好きに採点する。同じ審査員でも時間や日や体調によってグッとくるものが変わる。だけど審査には「間違い」というものはない。優勝とか決勝とかを目的にしない。準決勝まで行けると思っ出すとだいたい行けない。そう思っていなかった時に転がり込んで来るのが優勝みたいなもの。私たちはとにかく楽しいことをやってるので、その楽しさは、自分が取材して感動して、こんな面白いことがあったよということを、喋って伝えて番組にして伝えて、見て聞いた人も同じように感じてもらえるかどうかというそういう活動だと思う。だから自信を持って頑張ろう。

この他に「基本的な番組構成の仕方」「インタビューの活用の仕方」「テロップの使用程度は」「尺を縮めなければいけない時にどんな部分を削るか」などの質問にそれぞれ答えていただきました。最後に「街頭（校内）インタビュー番組を制作してみよう」というご提案をいただきました。カメラマンとディレクター兼インタビュアーの2名で、「あなたのトップニュースは何ですか？」と取材しまくる。以前NHKでもこれでとても評判のいい番組ができた。瞬発力やインタビュー力を高めることにも繋がるのでぜひお勧めしたい。

この他にもここには書き切れない学校へ持ち帰って役に立ちそうな楽しいお話をたくさんいただきました。津川さん、ありがとうございました。